

## 基調講演「教育課程と飼育」

無藤 隆

白梅学園大学の無藤でございます。よろしくお願いいたします。

すでに午前中から様々な実践について、幼稚園から高校、また教育委員会を含めて発表いただきました。それらの発表のポイントを整理しながら、動物飼育が果たす役割、意義等についてお話ししたいと思います。

私のレジュメがお手元の大会資料の1ページにありますので、ご覧ください。

ただいまご紹介にもありました、現在学習指導要領の改訂を行っているわけです。そこでどんなふうに動物飼育が位置づけられるかということですが、指導要領の改訂自体が延び延びになっておりまして、最終的には、今年の秋くらいになりますので、詳細についてはよくわからないというところがあります。

今までのことで申し上げると、動物飼育は生活科の中に入っていますけれど、もう少し強調される形で生活科の中に位置付くだろうと思います。それから、小学校3年生以降につきましては、総合的な学習の時間の中で、特に中学年くらいになりますが、動物飼育を位置づけていくということになります。ただ、総合的な学習の時間につきましては、学習指導要領の中でどのように表記するかということについて、まだ煮詰まっていないところはありますが、何らかの形では触れられるのではないかと思います。

今日の発表にもありました、理科、特に生物の学習とどう関連づけられるのか、というところでは、少し微妙なところがあって、理科の教科の授業時間の中で、飼育活動まで盛り込むのは少し難しいかと思います。たぶん小学校理科は授業時間は多少増えるとは思いますが、それでもその中で体験的に飼育を取り入れるのは少し難しいので、生き物との体験に対して関連づけを図るくらいかと思います。つまり、理科の時間の中で体験させなさいというよりは、動物とのふれあいの体験を理科の授業の中に取り入れなさいという形になるというくらいの感じではないかと考えています。

それとともに、今日も何度も出てきましたが、命の教育という観点から、動物飼育が重要であるということが指摘されています。これは、小泉内閣の時の小坂文部科学大臣は国会答弁の中で、去年の6月くらいだったでしょうか。命の教育との関連において、動物飼育は非常に重要であると答えています。国会答弁で答えるということはすごく重いことでありまして、命の教育の基盤をなす位置づけがなされたということになります。



ただ、その命の教育というものをどういうふうに見解するかということは、いじめ問題などいろいろな事件の中で重要なことは言われておりますが、命の教育の授業時間というものが設定されているわけではありませんから、どのようにしていくかはなかなか難しいところがあります。おそらく、総合的な学習の時間と道徳、特別活動との組み合わせの中で、他の教科ともつなげながら展開するということになると思います。その中の一環として、飼育というものが入ってくることになります。

一方、小学校高学年や中学校ではどのような形になるかといいますと、たぶん義務づけ的なことは難しいかと思います。特別活動の中で行ってもいいというくらいになるのではないかでしょうか。以上のようなことが、今のところわかっていることです。

もう一つのことは、ここには書きませんでしたが、先ほどの久喜市の教育委員会のご発表で、いろいろ市民から批判があって、それをきっかけにして、飼育の状況の改善を図っていくというお話がありました。これは非常にうまくいった事例ですが、市民からの批判や保護者からも、鳥インフルエンザやアレルギーなどの心配も出てくるでしょう。そういうときに一番多い反応というのは、「動物飼育をやめる」ということになります。久喜市ではきちんと飼育するという方向に移ったから良かったですが、批判があるから全部動物飼育をやめるという方向も考えられると思います。一部の学校では、すでに乳類は飼育しない、鳥類も飼育しない、キンギョくらいにしておいて、それも全部先生が管理するということになると、そんな方向に行ってしまった学校も最近非常に増えているようです。

ですから、批判の上で建設的に取り組むという

努力を、まさにこの研究会の使命としてやっていくべきだと思っております。そういう意味では、批判ばかりではなくて、どうすれば、プラスの側にしていけるかということが大事だと思います。そのときに、幾多羽化の大事な点があると思います。一つは、教育的な意義を明確にしていくということ。何に役立つかということです。二つめは、その教育的な意義を実現するためには、具体的にはどのような形が望ましいのか。今日午前中からずっと発表があったのは、まさにそこをねらったことなのではないかと思います。そして、三つ目は、そのための具体的な手立てとして、特に獣医師会との連携や、様々な専門家、ボランティアとの連携が不可欠になります。それをどう構築していくかということが大切です。わざわざそう言っているのはどういうことかというと、適切に動物を飼うという条件をつくる意味でも、専門的な助言が必要ですが、それだけではなくて、適切に飼うということがあって、はじめて教育的な意義が実現できることになります。総合討論のところで、私どもの研究を発表できると思いますが、そこで、動物飼育にはよいところがあるという話が出てまいりますが、動物を飼うと、自然にそのようなよいことがあるわけではなくて、子どもがかわいがって、動物を適切に飼育するという条件が整って初めて意義があるということになります。そのところを丁寧に伝えていく必要があるのではないかと思います。

そういう意味で、午前中からいくつかの発表がありましたので、それを、以下の2~6に整理いたしました。まず、幼稚園や小学校での飼育の基本的なことですが、一つには、今日あまり出てきませんでしたが、ペットのように飼う場合と、野外で生活している動物を一時的にですが飼う場合があります。たとえば、後者の場合ザリガニをどこから捕まえてきて飼うことがあります。このような場合は、通常、長く飼うことはあまりなくて、1ヶ月くらい飼ってから、池に戻すということが普通だと思います。しかし、その両者とも意味があるように思いますので、このように野外で見つけてきた動物を飼うということについてもその位置づけを考える必要があると思います。

2番目に必要なことは、何度も指摘があったように、動物をかわいがるということです。つまり、動物に対して愛着を持つということが一番大切なことだということです。そのこととともに、適切な飼育方法を守るという必要があります。多くの教員は、適切な飼育方法といわれてもわからないわけでですので、やはり専門家の指導を受ける必要があります。いつだったか、この会で私が指摘したことがありました。多くの、特に小学校などの教員に、飼育法についての誤解があったように思います。たとえば、ウサギが何十頭もいる状態も、野外での自然な状態だと思っている場合があ

ります。野外では自由に子どもも生まれるし、自由に穴を掘ったりしているという思い込みです。そこには二つの誤解があります。一つは、飼育小屋のような狭い中に何十頭もいるということは野外ではないわけです。もう一つもっと大きな誤解は、学校の飼育小屋というのは人工的な環境ですので、そういう中で、動物に対して愛情を持ち、かつ、動物にとって苦痛でないような飼い方をする場合には、単純に野外の状態に近づけるということではなくて、人工的な環境の中での適切な飼育方法をとる必要があるわけです。そういう意味では、まずは清潔であること、動物が恐怖心を感じないように安心して生活できることなど、いくつかの条件があると思います。このことについては、廊下の方でマニュアルを販売していますので、ご覧いただきたいと思います。

その上で、学校で飼っている場合は教育的な目的がありますので、子どもが接することができるような条件、子どもが愛情を持ってかかわるような飼い方が必要になります。そうすることによって、子どもにとって身近で毎日見られるような場所に動物を置こうとか、飼育小屋にしても、子どもの目にと毒場所にしようとか、そのような用件が出てくるように思います。また、幼児や小学校低学年の子どもというものは、完全には自分たちで世話をすることは難しいと思いますが、何らかの関わりを持たせるということを入れながら、動物と一緒に遊ぶというようなことが大切です。このように、動物に直接触れる機会を持たせるようなことをしないと、なかなか動物に愛着を持つということは難しいと思います。

それはあくまでも、適切な飼育法との関連の中で、動物の種類に応じての抱き方であるとか、世話の仕方であるとかということを、きちんと指導していく必要があるのではないかと思います。

このように、動物が快適に生活することができるということと、子どもたちにとって身近に触れることができるということ、これらの両立というものが可能であるということを本研究会で申し上げてきているところであります。もちろん、動物の種類によるわけで、子どもにとって世話しやすいとか、愛情がわきやすい動物とは何かということを、いろいろ考える必要があると思います。そういう意味でも、今日の発表によく出てきた、モルモットやウサギ、チャボなどが定番になってきたということは、先ほどのことの両立が比較的やりやすいということなのではないかと思います。

さらに、かわいがるだけではなくて、きょういくてきないぎということでかんがえてみると、動物の様子の観察ということを可能にしていく必要があるのではないかと思います。その観察というのは、必ずしも、理科で言っているような、たとえば昆虫の足が6本であるとか、そういうことに対する直結する必要はないわけで、まず、その

様子を細かく観察することが必要です。たとえば、ウサギが安心した穏やかな表情をしているとか、ウサギがうれしそうであるとか、モルモットが走り回るのは怖がっているのだとか、そういう様々な指摘がありました。そういうことが世話をしながらだんだんわかってきます。また、そのような観察の状況を見取ることで、授業の中に生かしていくことができます。

さて、その上で、教育的な意義として、4つほど考えてみました。

第一は生物の基礎の理解ということです。理科教育の中には、物理学や化学とともに生物学があるわけです。先ほどのビデオにあったように、ニワトリを怖がる子どもにニワトリの足が2本だということを理解させることにどれだけの意義があるのかということです。それよりもむしろ、動物に直接触れてかわいがる中で、動物の足が4本であるとか、2本の足を使って歩いているということとか、いうことがわかつてきました。理科としての知識を教えることができるのだと思います。そういう意味では、大学で理学部に入つてみると、このような素朴の動物の話はなくて、分子生物学であるとか、細かいことを勉強するようになってしまいます。そういうことの前に、昆虫採集でも動物飼育でもよいと思いますが、素朴に動物に接することをもっと大事にしていきたいと思います。その際に、理科という教科から見たときに、この学年ではこういうことを学習するので、そのためにこういう観察をするという発想になりやすいと思います。しかし、動物飼育という立場で見てみると、そこで、どういうことを子どもが経験できるか、また、どういうことをそこで発見するか、だいたい予想はつきますが、わからないということの方が多いと思います。体験学習というのは、出たとこ勝負というところもあるので、そこで子どもたちが見いだしたことを探して考える必要があると思います。そこでのことは、理科教育として考えると、その学年の学習指導要領の内容からかなりはみ出していることになります。しかし、それは全然かまわないわけで、子どもたちが動物にかかわって何か見つけたとすれば、それはとても重要なことであると言えます。今日の発表でいえば中学校の事例で、ウニとメダカの飼育ということがありました。これは、理科教育の一環として行っていました。しかし、このようなことは中学校の教科書には出ていないわけで、レベルがある意味では高いわけですが、子どもたちがこのような変態の様子に気づいていくということは貴重なことだと思います。それが、理科教育にどう生きるかというときに、中学校の教科書の内容を理解するというところからは確かに離れています。しかし、生き物の生き物らしさを見つけるという意味においては、非常に意義が深いと思います。

もう一つは、理科教育という視点から考えたとき、生物は様々な固有の特徴がありますが、それがどういう働きをもつのか、ということについて、理解していく必要があるのではないかと思います。ウサギでいえば、前足と後ろ足の長さが違つて飛び跳ねるとか、耳が長くなっているとか、糞には2種類あるとか、こういうことがウサギにとってどのような意味をもつのか、ということを見つけていく。あるいは子どもたちの経験の範囲では見つからなくても、本を読んで調べてみるとか、ということができると思います。

さらに、動物と生きる場との関連です。特にこれは、理科教育をもう少し広い範囲でとらえてみると、生態学的な、環境教育的な意味もあると思いますが、そうなったとき、ペットよりも野外生物の方が重要となってきたが、そういう動物がどこに暮らしているか、その動物にとってふさわしい自然環境は何であろうか、ということを理解していくことです。このことは、たとえば幼稚園レベルで言えば、ダンゴムシというのはどこに行けば捕まるのかということとか、ザリガニを捕るにはどういう池がいいのかとか、そういうことを知ることが始まりでしょうし、あるいはかなり難しい例で言えば今日の発表のウニにとつて、変態の時にモが必要であるとか、海水はどういう状態である必要があるとか、という生きる場との関連ですね。また、ウサギは今はペットのようなものですが、どういうえさをあげてどのように飼ってあげればいいのかということも、生きる場ということです。そういういくつかのポイントを押さえながら、動物飼育を広い意味での理科教育、あるいは生物学教育の始まりに生かしていくことができると思います。

二番目には、命の教育ということがあげられます。最初に申し上げたとおり、命の教育との関連で、動物飼育をどう行つたらよいのかということが問題となっていて、特にその中で動物飼育を位置づけてみようということが有力な考えになりました。命のあり方について、子どもにとって人の中に命を見いだすことはかなり難しいことだと思います。したがって、小さい子どもにとっては、人間以外の動物というものを通して、命あるものの実感を得ることができます。その中で、鳥類や乳類であれば温かさの実感をもつということだと、ウニであれば、その特徴を表す触手であるとか、ということの実感を通して命を感じることだと思います。ウサギもニワトリもウニも外観は全く違いますが、それぞれが生き物らしさをもっているとわれわれは感じることができます。したがって、このような生き物にどう出会わせていくか、ということが必要で、図鑑などを見ることではうまくいかないことです。ビデオはもう少し実感的になりますが、やはり、生身のものと比べると弱いという

ことが言えます。また、1回限りの出会いというものが非常に大切なではないかと思います。映像というもののすばらしいところは、手に入れようと思えば手に入るということです。また、それを見て感動も得ることができます。しかし、自分が飼育して得られる感動とは、やはり質がずいぶん違うのではないかと思います。実物と出会うことで、生き物らしさを実感することができます。そして、1回限りの出会いということは、生まれるところから死ぬところまで立ち会うということを意味しています。いくつか死の情景が今日の発表の中で出てきましたが、どれも子どもたちが非常にショックを受けていました。しかし、ただ怖い目にあったということではなくて、心の中で何か感じができるというショックを子どもたちは受けたのではないかと思います。そこに非常に意味があるわけです。

そんなふうに言うと、ときどき誤解されて、死ぬような動物を飼う必要があるかと言われる方がいます。それは話が逆であるということで、動物は生かす努力をした上でそれでも死んでしまうことに意味があるわけで、最初から死ぬ予定で飼っている人はいません。それはともかくとして、動物を世話することはとても大切なことではないかと思います。誰かが世話をしているところに行って、どこでかわいがるだけではちょっと弱い気がいたします。たとえば、動物園では、基本的には動物園の係の方が世話をしていて、われわれはそこに行って珍しい動物の生態を見るわけです。ときどき、動物とふれあえることもありますが、それは単なる遊びとしてのふれあいです。命の教育として考えるならば、何ヶ月か何年か世話をすることによって、特定の動物と自分という個別の関係が生まれて、そこに愛情が育っていくわけです。このように、世話ということと、かわいがるということを不可分のものとしていくことが必要ではないかと思います。

動物飼育を丁寧に行うことと、さらにそれを、人間の妊娠や出産や育児等とどこかでつなぐことによって、命の教育としての意義が生まれてくるのではないかと思います。たとえば、私がある小学校で見た例では、妊娠したお母さんのおなかに聴診器を当てさせて、赤ちゃんの心臓の鼓動を聞くということをやっておりました。実は、妊娠した先生というのはたまたま担任の先生で、その先生は妊娠したので自ら教材になると言つて、1ヶ月に一度ずつ聴診器を当てさせて、これを赤ちゃんが生まれるまで続けていました。そして、赤ちゃんが生まれてからも赤ちゃんを学校に連れてきて子どもたちとふれあわせたという実践を行っていました。このことは、たまたまであったにせよ、子どもたちにとって非常に貴重な経験となったようです。このようなことと、動物飼育とをつなげ

ることによって、命の教育が形作られていくのではないかと思います。

あと二つほど加えてみたいと思います。5番目として書いたのが、情緒の教育の場です。こどもが動物をかわいがる様子とか、動物が死んでしまってショックを受けている様子とか、動物を対象とした喜怒哀楽が子どもたちに見られます。多くの親御さんは子どもたちをかわいがっているわけで、この場合は子どもにとって愛情を与えられていることになります。一方で、子どもたちが愛情を与える側にどこまでなっているかを考えると、そういう機会はなかなかないことがわかります。そこで、動物を飼うことによって、動物に愛情をかける機会が生まれるのです。愛情をかけることによって、うれしいこともあるけれど、動物が死んでしまうときのように、悲しいこともあるわけです。そういった、深い喜びと深い悲しみの両方を経験するということは、たとえば、ゲームで高得点をとったときの喜びや、悲しい映画を観たときの気持ちとは違うものがあるのではないかと思います。生身の関係の中で生まれる喜怒哀楽というものを今の子どもたちがどこまで経験できているのかというところで、動物飼育の意味があろうかと思います。様々な作文や子どもたちの表情が今日の発表の中に出てきましたが、その中で、動物の微妙な動きや、動物の感情や表情というものを感じ取ることができる子どもの感性の広がりも大事だと思います。

最後に身体性の教育の場というのは、聞き慣れないかもしれません、たとえば、ウサギを抱くチャボを抱くというときには、人形を抱くのとは違って、動物を抱くのにふさわしい抱き方をしなければならないわけです。つまり、動物に配慮した繊細な抱き方をしなければならないということです。このことは、実は、友達どうしであっても相手に配慮した接し方が必要でありますし、赤ちゃんやお年寄りに対しても、その人にふさわしい接し方をする。それは気持ちとして相手がふさわしいようにということではなく、相手が出しているシグナルを体で感じ取り、相手にあった行動をとることができることです。こういった、微妙で繊細な体の動かしが、動物を飼育する中で養われていくと思っております。

ということで、動物飼育の大変な意義を整理してみました。そして、それが学校現場に少なからず負担を強いることになりますが、それを上回るだけの意義があるわけで、その意義を実現する意味では、学校関係者が、ここのたくさんお集まりの獣医師の方々とたくさん連携することが必要なのではないかと思います。

以上で、私の基調講演を終了いたします。

(白梅学園大学長)